
喧嘩するほど仲がいい

夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喧嘩するほど仲がいい

【コード】

N01010

【作者名】

夏

【あらすじ】

沖田が結核にかかります。

その時のみんなの心情。そして沖田の本当の想いを打ち明けます。

(前書き)

この小説は作者が妄想で作り上げた、捏造ネタです。

沖田がもしも本当に結核で死んでしまったら的々たる感じですよ。

沖田&土方キャラが違つかもしれません。

これを読んで後から文句を言っても作者は知りません。

それでも良い方は読んでね

『サヨナラ』

なんて言わねえぜ。

だってオメえは俺の魂の中で生き続けてんだからよお。

あれから何か月が過ぎただろうか。

医師から結核と告げられ、部屋にこもりっ放しで日にち感覚がくる
ってしまったようだ。

そつと障子を開けると、まぶしくしかしやわらかな太陽の日差しが
降り注ぎ、まるで幼い子の頭をなでるように風がそよぐ。

こうしていると、まるで死後の世界に広がるという楽園の花畑にで
もいるような感覚に陥る。

しかし、それもつかの間。一番聞きたくない声で現実に戻される。

「総悟才。何してんだ。寒いから早く部屋入れ。」

「なんでイ土方。死ネ土方。人がせつかく穏やかな目覚めを楽しん
でんのに邪魔しねえでくだせえ。」

いつものように悪態をつきながら言う。
すると当の土方は、瞳孔を開きながらため息をつき平静を装う。

「いいから入れ。春とはいえまだ朝方は寒イだろうが。」

素直に体が心配だ、と言えればいいものを。

しかし、それが彼なりの心遣いだと知っている総悟だが、Sの血が沸き起こり質問攻めをしようと口を開いた。が、

「ゴホツゴホツゴホ！」

「総悟！！！！」

急いで背中をさすったわいいものも、白く細くなってしまった腕にまで滴り落ちた血を見て、言葉を失った。

「……ツ！！！！そう」

「大丈夫でさア！」

「総悟……。」

全く大丈夫そうではない。しかし、彼にとってはもう、毎日が大丈夫ではない。

手洗ってきまさア、と言って立ちあがり部屋を出て行ったとたん、俺は手が震えていることに気付いた。

「チツ。……情けねえ……！」

最近の総悟は心配されるのをひどく嫌がるようになった。せき込みながら苦しそうに血を吐けば心配しないものなどいない。

しかし、総悟はそれが気に食わなかった。

以前なら、咳をしていようが熱を何度出そうが、仕事しろとつるさかったのに、最近では、外に出るな。布団で寝てろ。薬飲め。などと、みんながみんな口うるさく言うってくる。

近藤さんは近藤さんで、心配だオーラを出してくる。

「みんな分かってねエヤ。病人にとってそういう優しさが、逆に怖エんですア。」

手にこびりついた血を洗い流しながら、総悟はクソツと吐き捨てた。

「副長。」

俺は監察の任務で手に入れた情報を副長に報告しにやってきていた。それと、最近沖田隊長を見てずっと思っていたことを副長に聞いてみることにした。

「なんだ。」

「沖田隊長の事なんですが。」

「総悟がどうかしたのか。」

「あ。その……。」

「病院になら移さねえぞ。」

どうやら、俺が言うことを悟っていたようだ。

「ッ！どっどっしてですか！？沖田隊長あんなに弱ってるんですよ？このままここで治療しても良くなるもんも良くなりません！」

「そうだな。」

「そうだなじゃないですよ！どうしてそんなに冷静でいられるんですか！？副長は沖田隊長の事心配じゃないんですか？」

「……………」

「何とか言ってくださいよ！このままじゃ！このままじゃ沖田隊長は……………」

死んでしまう……………。しかしそれだけは言えなかった。いや。言うてはいけないと思った。

「……………話はそれだけか。なら出ていけ。」

「副長！」

「出ていけ！」

「……………失礼します。」

分かっていった。副長が一番心配していることなんて、でも、きつと沖田隊長がそれを望んでいないのだろう。分かっていった。

しかし、やはり見ていられなかった。

日々弱っていく姿を。それを平静を装って看病する副長を。痛々しくて、悲しくて、見ていられなかったのだ。

「よお総悟。具合はどうだ？」

「近藤さん。よくはないですよ。」

「そつか。」

しばらく沈黙が流れた。

「近藤さん。」

「ん？なんだ？」

「俺。もう長くないみたいでさア。」

「！？総悟！」

「わかるんでさア。てめえの心臓の音がどんどんどんどん小さくな
っていくのが。」

「総悟！」

総悟を抱きしめた。そこで改めて総悟の細さに驚いた。
なんだか、嫌な予感がする。すると廊下を隊士が歩いて来るのが見
えた。

9

「おい。そのもの。医者を。・・・いや。トシを呼んで来てくれ。」

「はい！」

「近藤さん。奴を連れて来るんですかイ。全く嫌がらせですかイ。
俺はあいつが大嫌いなんですよ。」

するとドタドタと騒がしい音がした。かと思うと、勢いよく部屋に入ってきた。

「近藤さん！総悟は！」

「ほらねイ。これだから本当に嫌いなんですか。死ね土方。」

「総悟……。」

「なんでイ。つまんねーな。どうしたんですかイ。そんな顔して鬼の副長が」

涙なんか流すんじゃないよ。

クソッ。こんなヤローに同情されるなんざごめんだ。いつもなら、笑ってからかうのに。なんも出てこねエヤ。

「土方さん。」

「ごめん。ごめんなあ。俺、代わってやれなくてッ。」

「ホントですか。はは。笑えねエヤ。」

「総悟「土方さん。」!?」

「俺はあんたが嫌いだ。俺の大事なもん、全部持つて行きやがる。あんなに無愛想で、いつも眉間にしわ寄せて、全然笑わねエし、なんかム力つくし。でも、一番むかついたのは、そんなあんたをいつの間にか好きになって言ってる自分だったんでさア。」

「総悟……。」

「土方さん。俺、死ぬのが怖いんでさア。」

「当たり前だ。俺だつて怖えよ。」

「……ツ！死にたくない……死にたくない！」

「ああ……。」

「クソツ！なんで……ウっ……。」

なんで俺なんだよ。やっぱりいつも仕事サボってたから罰があたったのか。あーあ。なんで土方のやるーなんか抱きしめられなきや

なんねーンだよ。

でも

安心する。

近藤さん。そんなに泣かねえでくれよ。

土方さんも。ザキも。みんな。

俺は、幸せだ。

こんなにたくさんの人が俺のために涙を流してる。

姉上。今からそちらへ行きます。

「土方さん。後は頼みましたぜ・・・」

ゆっくりと瞼が落ちた。

3年後

今日は総悟の命日。

相変わらず近藤さんはおお泣き。

お前がいなくなっただせいで、屯所は静か・・・ではないが、お前がいた時よりは静かだ。

仕事サボって、あのむかつく目隠しして寝るやつもいねえし、何かとバズーカをうって町を壊す奴もいねえ。まあ相変わらず万屋3人とは喧嘩するがな。

まあ、つーわけでオメエを忘れるのには時間がかかりそうだがぶん全部忘れるには死ぬまではかかるな。いや、きつと忘れられねえな。だって

「オメエは俺の魂の中で生きてんだからよお。」

(後書き)

読んで下さってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0101o/>

喧嘩するほど仲がいい

2010年10月8日22時49分発行